

トリップして大冒険

ウボアー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ダイの大冒険の世界にトリップしたら、いきなりスライムにマスターって呼ばれました。でもって早々に魔王軍に捕まりました。本編にかかわるの確定事項ですかそうですか。

とにかく、作戦はいのちだいじに。そんな女の子の話。

目次

第一話	青いアイツと獣王	1
第二話	ようこそ地底魔城	7
第三話	さようなら、ありがとう	14
第四話	ボス戦に向けて	21
29	第五話 優香達が戦いに参加した!	

第一話 青いアイツと獣王

目を覚ましたら、森の中でした。……はい？

どことも知れない場所に私はいた。土や草の匂いが私を包んでいる。独特な獣臭もする……気がする。

いやほんとに何処ですかここ？ 森なんて学校行事の林間学校ぐらいしか覚えが無い。誘拐されるほどお金持ちなわけでもないし……。いや誘拐だったら森に置き去りはないよな。

熊とか野犬に襲われたらどうしよう。そういえば、山で迷ったら川に向かえ。川に辿り着いたら下流に向かえば村があるのかなんとかテレビで言ってたな。とりあえずここから移動、と思つて立ち上がる。

その瞬間、ガサガサと茂みが揺れた。

「……………ピキ」

今まで聞いたことがない鳴き声。いやなんだピキつて。そんな声を野生動物が出すなんて知らないぞ私は。

揺れたあたりから、青い何かが飛び出してきた。ぽよん、ぷるんと弾力があるそれに

は、くりくりした目とにっこり笑顔な口があった。

ぴよこぴよこ動く青い何かが、ぐーんと伸びて、私に向かって跳んで。

「ピッキイイー……！」

「ぐふっ！」

お腹にダイレクトアタック！ 勢いに負けて地面にどさつと音を立てて倒れこむ。

いきなりぶつかってきたそれは、私にぐりぐり体を押し付けるようにして、ピキュ、ピジュ、と泣いていた。……泣いて？

「よかつたあ……生きてたあ……」

ぐじゅ、と鼻をすするような声とピキピキ声が重なって聞こえる。私に向かって突っ込んできたそれは。

「……スライム」

なんでスライムの言葉わかるんだ、とかここ結局どこなの本当にドラクエなの、とかいろいろ謎が出てくるけど。

「とりあえず、どいてくれないかな……」

「……ピギイ!?!」

そう言われてやっと今の状況に気付いたスライムはぴよんと地面に降りる。ウルウル目でこつちを見上げるスライム。

「うう、ごめんね。僕、悪いスライムだ」

「いや誰も悪くないからねこれ。泣くほどじゃないって」

「けが、痛くない？」

「大丈夫。怪我なんてないから」

ほら、と肩を回して元気アピール。それを見てスライムはやつと落ち着いたようだった。

「治ってた、よかった！ ベホマラー一回だけしかかけてなかったから」

ベホマラー。ドラクエの回復魔法の中でもかなり高位の呪文。それをスライムが使った……？ いや、治ったって言わなかったかさつき。

「私、怪我してたの？」

「うん！ びっくりしたよー。空から落っこちてきたから」

「えっ」

空から落下?! なんかつんでもないこと起こってたぞ私の体。

「大変だーってなって、すぐにきたんだ。みんなは、人間なんかほっとけって言ってたけど……」

「みんな……って」

いやな予感が頭をよぎる。

「わああ、しつかりしてー！」

「グワツハツハツハ！ たかが人間一人とスライム一匹、大した敵ではないわ……む？」
クロコダインがその両目で私たちをとらえる。上から下までしつかりと確認して。
ぱちぱち、と目を瞬かせる。

「女……だと？ なぜこんな所にいる？」

それは私の方が聞きたいです。そういえば、隻眼になつてないつてことはまだダイとは戦っていないのか。とにかく、ここはなんとかごまかしておきたい。ザボエラの策にのっていた時を除けば、彼は武人としての確かな誇りを持っている。戦う手段のない女子供に手を上げる人ではない。

そう結論を出すと時間の感覚が戻つて来た。私が何か言おうと口を開くと、スライムが私の前に出てきて。

「んーとね、マスターね、空から落っこちてきたの」

答えちやつたよこの子！

「そうかそうか、……もつとまともな嘘をつけ」

「うそじゃないもんホントだもーん！ 『ライデイン』！」

「へあっ!？」

「何だと!? ぬぐあつ！」

スライムが呪文を唱えると、クロコダインに稲妻が落ちる。完全に不意打ちだった。まともに喰らってしまつた獣王はその場に膝をつく。

「今のうちに逃げようマスター!」

「へ、あ、うん。わかつた!」

呆然としている私を急かして走り出すスライム。数瞬遅れてそれを追いかける私。

「逃がさん! うなれ、真空の斧!!」

「ピキー!?!」

「うわあっ!!」

風に足を取られて二人ともすつころぶ。背後からずしん、ずしんと足音が迫る。

「そのスライム……まさかライデインを使うとはな。貴様も何か切り札を隠しているのか?」

いいえ持ってないですJOKERもこの世界にはいないですおそらく。

そして、クロコダインがスライムをつかみ上げこつちを睨む。

「マスター……とか言われていたな。貴様も来てもらおうとするか」

「……………ハイ」

とりあえず、一つだけ言わせてほしい。どうしてこうなった?

第二話 ようこそ地底魔城

ここは地底魔城、の牢屋。なんで私達がここにいるのかひとまず整理してみよう。

最初に、クロコダインが悪魔の目玉を通じて私たちの事を速攻で魔軍司令ハドラーに報告。でっかい組織だしハウレンソウ大事だもんね、仕方ないね。

それで、「ライデインを使えるスライムだ?!」ってハドラービツクリ。小物時代の象徴、鼻水は出たんだろうか。

そのスライムを調べれば魔王軍の増強に使える！ ついでにマスターとか言われているその人間は人質にしよう！ でもわけわかんない奴をいきなり鬼岩城に連れて行くのもあれだし、てなわけでもちよつと判断する時間がある。なら監禁だー、つてなるのはさすが魔王の部下。じゃあ誰にしよう、つて悪魔の目玉を介してプチ会議開始。悪魔の目玉はスカイプとしても使用可能なのかー。

まず、フレイザードは無し。任せたらその日の内に難癖付けられて私達丸焦げか氷像になるよね。

次、ザボエラ。あの野郎がおとなしく監禁だけ、てのは信用できない。それは私も同感です。

ミストバーン。そもそも喋らなかつた。ミストバーンがよく喋るようになるの、原作始まってからなんだよなー。

クロコダイ。部下が人間の世話に向いてない。そもそも魔の森に牢屋が無い。

何……だと……ぐわああっー！ 私の中の一番希望がけつこうまともな理由で切られたー！ おっさんの所にいたらダイ達と出会うのがすぐ終わるのにー！ 魔王軍に捕まっていたの大変だったでしょう、て流れて保護されたかもしれないのにー！ そんなこんな話し合つて、ヒュンケルに押し付けた……もとい、任せた。

え、けつこうまともそうなバランさん？ ハドラーがなんとか理由つけて候補から外したよ。超竜軍団をこれ以上強くしたら魔軍司令の地位が、つて小物なハドラーは考えたんでしょうよ。たぶん。

……なに？ まずどうやって地底魔城まで来たかつて？

「空の旅たいへんだつたー」

そう、私達はガルーダにわしづかみされて空輸されたのです。私を助けてくれたスライム、ヒーローはトベルーラを使えないとのこと。つまり飛行中に何か抵抗したら地面に真つ逆さま。移動中、生きた心地はしなかつた。

やつと地面に降り立つたと思えば地底魔城のある死火山の火口だったし、目の前には鎧の魔剣装備したヒュンケルが待ち構えていたし。ヒエツて声出たよ。

まあ声零した瞬間ヒーローが私の前に出て、ヒュンケルとにらみ合ったかと思うといきなり「ついてこい」だったからね。わけがわからないよ。普通の人は目で会話できないからね!?

あ、食事も衣服も寝床も用意してくれているのはすごくありがたいです。一文無しなので。このまま原作に入るまで監禁ライフを過ごさせていただきましょうか。

「ねえヒーロー」

「なーにマスター!」

時間だけはたっぷりあるので、気になったことをいくつか質問してみる。

「その……なんで私をマスターって呼ぶの? 私の名前優香なんだけど……」

「えー、マスターはマスターなの。僕よくわかんないけど、空から落ちてくるの見て、あの人をマスターだっけこう、びびっと」

「びびっと」

このスライムは一体私の何を感じ取ったのだろうか。私は何も戦闘能力のない一般市民です。それに。

「そのマスターって呼び方、なんか変な気持ちになるからやめてほしいな……」

だっけ言葉として聞こえるヒーローの声がピュアな男の子って感じなの! そんな声でマスター呼びはいろいろ危ない! 主に私の精神が。

「普通に名前でもいいからさ」

「……………いいの？」

ヒーローは心配そうな顔で見上げる。何処をどう心配しているのかこっちはわからないけど、スライム的に問題はあるのかな？

「マスターがそう言うならいいけど……………フケイじゃない？」

「そこまでの権力もってないので問題ありません」

「……………うん。わかった！ よろしくね、優香！」

「（こちらこそ、ヒーロー）」

手とスライムボディをこつんと合わせ、二人で笑う。この感じなら大丈夫かな。触感とかちよつと気になったので椅子に座って、ひよいつと抱きかかえる。おお、見た目通りのぷにぷに感。ほっぺを突つついてみる。

「んむ、くすぐりたいよー」

かわいい。まんざらでもなさげな声。うりうりといじくっていると、ヒーローの目がとろんとしてきた。

「んみゆ……………」

「あふ……………」

二人とも同時にあくび。トリップしてからずっと気を張り続けてたからか眠い。私

は森で目を覚ましてから流されるままだったけど、ヒーローはどうしたらいいかずと自分で考えて行動してたんだよね。

「……ありがとうね」

「くびー……」

ありや、寝ちやつたか。それに、私ももう限界かな。

「おやすみー……」

二人のいる牢屋には寝息しか聞こえなくなつた。

「……………」

扉の横で耳をそばだてていた剣士は、音をたてぬようそつと歩いて行つた。

「あ、ミイラさん。ありがとうございます」

「ありがとうー！」

「……あ、ああ……」

朝ごはん持つてきてくれたミイラにまず感謝。私はこれからどうするか、考えた結果がこれ。ありがとうって言ってくれる人に悪い気は起きないでしょうよ。これをずつ

と続ければ私達に敵意は無いつて伝わるはず。届けこの思い！

で、ご飯の内容はパンにスープとまさに洋食。定番だね。だがすまんミイラよ、私はご飯派なんだ……。でもこの世界にお米つてあったっけ？ まあ出されたものはきちり食べますがね。文句は言わない、言うのは感謝。

パンをちぎつてスープに浸してパクリ。うん美味しい。

「おいしー」

「ねー」

ほやほやしている私達。ヒーローなんか後ろに花が舞っているように見える。ここ牢屋じゃなかったっけ？ あれ？ って顔で私たちを見るミイラ。

「……お前ら、ここが牢屋だつてことわかってんのか……？」

「もぐもぐ……わかつてるー！」

「……そうか」

あ、ミイラが頭抱えだした。そりゃ敵のアジトでのんきにご飯食べる人なんてそうそういないからね。

「あ、心配しなくても（今は）脱走しませんから」

「……………そうか」

ミイラは、俺何であんなに警戒してたんだろうって感じのオーラを背中に漂わせなが

ら、扉を閉めて出て行った。

「悪い事しちゃったかなー……」

「え、なにがー?」

「……何でもないよ」

ヒュンケルに私たちの事どうやって報告するんだろうか、あのミイラ。変な事言わないよね……?」

第三話 さようなら、ありがとう

「お早うございます」

「おはようございます」

「おうお早う！ 飯運んできたぞー」

いやー慣れてって恐ろしいね。最初は警戒していたモンスターたちも、今じゃすっかり気軽に挨拶できる仲。何が好きか、とか外はどんな感じか、とか世間話もするようになったんですよ。なんて快適な監禁ライフ。そう、監禁。忘れそうになるけど、私達魔王軍に捕まってるんだよね……。

あれ、そういう研究のために鬼岩城に連れていくって話どうなったんだろ……？

「……原作じゃ、地底魔城は最後溶岩に沈むんだよね」

骸骨が出て行つたのを確認してから眩く。

私には、原作を変える力なんて無い。だから待つ。

クロコダイスが地底魔城で手当てされ、マームがダイ達をおびき寄せるための囿になる。その時をただただ待つ。私達が脱走するのは、マーム脱走に便乗できるその時しかない。

「優香、大丈夫。僕がいるよ」

「……うん」

ヒーローをぎゅつと抱きしめる。今ここにいる小さな勇者と一緒に、私はこの世界を生き延びるんだ。

「ヒュンケル様、よろしいので？」

「ああ、あいつらに渡したところでろくなことにはならん。それなら何処かへ逃げて行った、としている方がマシだ」

ハドラーとザボエラが訪れたのは少しひやりとしたが、俺の居城で勝手な事はさせん。もし何か探すような仕草をしたら、すぐに兵士たちに対応するように命令を出しておいた。魔王軍を裏切るような行為だが、誰一人として逆らう者はいなかった。

……我が不死騎団の兵士たちすら絆す女、か。なるほど脅威かもしれん。だが奴の目には、敵意などみじんも感じられなかった。連れていたスライムの目には、確かな光が宿っていた。

そんな奴らを、あの非力な奴らどもを強くするための実験体に……？ 冗談じゃな

い。そんな力、俺は認めん。今は意識のないクロコダイも、竜騎将バランも決して認めようとはしないだろう。

アバンの使徒を倒して、それで終いだ。鎧の魔剣を携え、闘技場へと向かう。

あの女とスライムを守るための魔王軍への裏切り。この選択に、俺には何の迷いも後悔も無い。

我が父バルトスも、きつとそうしただろうから。

地底魔城のあちこちで足音で響く。例の小僧、ヒュンケル様、と骸骨やミイラ達の声が聞こえてくる。ダイ達がやって来たんだ。

「……もうそろそろ、かな」

「準備おっつけーだよ！」

青色が牢屋の中をびよんぴよんくるくる飛び回る。私も軽く準備体操はしたけど、正直ただ走るだけで逃げ切れる相手じゃないよね。向こうは城の造りを完全に知っているけど、私たちは何もわからない。

つまり今回の脱走、鍵になるのはどれだけ相手の動きを止められるか。

「さん、に、いち……」

「いつかこの時がやってくるとは思っていましたよ、ユウカ殿」

「……え？」

私達が突き破ろうとしていた扉が開く。そこには、モルグさんが鈴を片手に立っていた。その顔はどことなく寂しそうな、見ているこつちが悲しくなるようなもの。

「むう、優香とぼくのじゃま？」

「いえいえ、とんでもございません。逆ですよ、脱走の手助けです」

どうぞ此方へ、と先導される。私とヒーローは顔を見合わせた後、後ろをついていくことにした。ヒーローは何時でも反撃できるよう、ライデインを使う準備をしながら。

「獣王殿の手当てでも終わっております。彼のお方ならきつと、お二人を無事に地上へと送り届けられるでしょう」

ゆつくりと廊下を歩く。兵士達はみんな私たちを見守るだけで動かない。こちらです、と扉が開かれる。

「……久しぶり、だな」

隻眼となったクロコダインが斧を片手に待っていた。その隣にはガルーダもいる。

「獣王の裏切りにアバンの使徒。これほどの機会、そうそう訪れるものではありません。」

ヒュンケル様直々の命令、今こそ果たすときでしょう。それではよろしく頼みます、猷王殿」

「ああ、任された」

ヒュンケルの命令。手助け。それらの言葉が意味するのは。

「……ちよつと待った。それじゃ、まるで」

「ええ、ヒュンケル様は貴方方を逃がそうとしていらしたのですよ」

「……………いつから？」

「貴方方が地底魔城へと来た時からその考えはあつたようで。世話係の言葉を聞いて確信しました。お二方を決して魔王軍に渡してはならない、と」

ずっと。最初っからこうするつもりで、私達と過ごしていた。

「あー……………うん。いろいろな急すぎて何が何だかわかんないけど……………」

ありがとう。それしか言えない。

その言葉を聞いたモルグさんにはにっこりと笑って、早くお行きなさい、と優しい声で返した。

「別れの挨拶は済んだか？ では、行くぞ」

クロコダイスが外へ向かって歩いていく。その後をついて歩く。私たちはその間、後ろを振り向かなかつた。

「む……何だ、この音は!？」

大地がゴゴゴゴと揺れる。どうやらこの音は地の底から響いているようだ。その事に気付いたクロコダインははつと顔を上げる。

「まさか噴火するの!? ユウカ、俺に掴まれ! ガルーダ頼む!!」

獣王の体に抱きかかえられるようにして掴まる。ガルーダはクロコダインの肩を掴み一鳴きして、上空へと飛翔した。

「あわわわ……溶岩が、ぜんぶ……」

腕の中でヒーローは震えていた。さっきまで自分たちがいた場所が、溶岩に沈んでいく。噴火はすべてを飲み込んでいった。きつと、地底魔城にいたモンスタ―たちも……。泣きそうになるのをぐつとこらえる。

「……この鬨気、まさか!？」

クロコダインが何かに気付いたようだ。そうだ、ヒュンケルは溶岩に飲み込まれて、その後……。

「時間も少ない、巻き込んでしまうが構わんか!？」

「大丈夫、やつちやつて」

「優香がそういうなら、僕もだいじょーぶ!」

「……フ、二人とも良い目だ。行くぞおツ！」

火口の中突っ込んでいく。斧を振りかざすとそこから疾風が噴き出し、溶岩を掻き分ける。その中心にヒュンケルがいた。鎧はぼろぼろ、全身大火傷で意識を失っている。

「ハアツ!!」

獣王がヒュンケルを抱き上げる。彼らは再び空へと舞い上がった。

「ひどいけが……はやく治さないと！」

「わかっている……あの森に降りるか。あそこなら安全だろう」

「………う」

苦しそうな顔をして呻くヒュンケル。

「今度は私たちが助ける番」

「ああ、そうだな。こいつは死なせたたくない、死んではならん男だ」

私たちは彼に助けてもらった。その恩を、まだ返していない。

「………まだ貴方に、助けてくれてありがとうって、伝えてないんだ」

第四話 ボス戦に向けて

「ヒーロー、いのちだいじに、ね？」

「りよーかい優香！ ベホマラー！」

「まさか、回復呪文まで使うとはな……。スライムの勇者、か」

きらきらとした光が私達を覆うと同時に、ヒュンケルの全身を覆っていた火傷がひいていく。それを確認したクロコダインが話しかけてきた。

「少し休ませてやったら意識も戻るだろう。……それで、お前たちはこれからどうするんだ？」

魔王軍などにかかわらず、故郷に帰った方がいいのでは、と彼は思っているに違いない。クロコダインは知らない。私達は何処へも行く当てはないことを。

候補があるとすれば、デルムリン島ぐらいいかな。何処の誰かわからなくてもきつと、ダイが育ったデルムリン島なら受け入れてくれるだろう。……でも。

私たちの都合で関係無い人達を巻き込むわけにはいかない！

「ヒュンケルが助けようとしてくれたけど、魔王軍に狙われているのは変わらないんで

しよ？ だつたら」

「ぼくたちも協力するよ、クロコダイン」

「……！」

クロコダインがはっと目を見開く。

「私自身に戦う力はないけど、ヒーローの力が必要になるかもしれない。そのときはよろしく、ね」

「おうともさー！ 優香はぼくが守る！ そして勇者も守っちゃう！ だつてぼくは

『ヒーロー』だもん！」

「……そうか、恩に着る！」

感謝の言葉とともに土下座しようとするクロコダインを止める。

「わ、そこまでしてくれなくてもいいですから！」

「ピキーン！」

あれからヒュンケルが目を覚まし、ダイ達に加勢することに決まった。私達も加勢するって伝えたらヒュンケルも驚いた顔して「……すまない」だったからね。力のない女が戦場へ行くのに悶々としているみたいだったけど、ヒーローがライデインを実際に使っているのを見てしぶしぶ了承した。

ヒュンケルとクロコダインにはヒーローの戦い方について相談すると伝えてから、少

し森の奥へ入った。二人とも根っからの武人だからね、後で練習試合を頼んだら快く承諾してくれたよ。……怪我しない程度にね？

魔王軍との戦いは激しいものになる。それにヒーローはスライムだから、いくら強力な呪文が使えるとはいえ攻撃を一撃でもくらえば倒れてしまう。ここはスピード勝負でいくしかないかな。

その間、私はどこかに隠れるしかないのが一番大変だな。でも私がいないと戦いにヒーローは参加しないだろうし……。ポディーガード呼びとかできたらいいんだけど。……あつゴールド持ってなかったわ。

「そっういやヒーローさ、なんでヒュンケルだけ回復すればよかったのにベホマラー使ったの？」

「あう」

「につこりスマイルが歪む。口をもごもごさせた後、聞き取れるぎりぎりの声量で呟いた。」

「……今のぼくが使える回復呪文ね、ベホマラーしかないの」

「……しか？」

「恥ずかしそうに頬を赤く染めこくと頷くヒーロー。とりあえず一言。」

「それとんでもないことだよ!? なんてホイミ飛ばしてベホマラー!? ダイの大冒険」

だとレベルアップじゃなくて契約して呪文を覚える。初級呪文から契約していったら、最終的には極大呪文……だと私思うんだけどなー。

それにしてもベホマラーの契約か。スライムがベホマラーなんて契約できるとは思えないんだけど。それだったらライデインもか。

「ヒーローが呪文の契約するのって大変じゃなかった？」

「……？ 契約なんてしてないよ？」

契約しないで。

え、ベホマラーをレベルアップで覚えたの!? ……いやスキルポイントの線もあるのか。ダイの大冒険だと特殊な事情がない限り契約無しで使えるのはありえない。

そうだとすると、ヒーローって一体何者なんだ……。別の世界からやって来た、とか。いやーそんなこと……ありえそうで怖い。

「それ、みんなには黙ってこうか」

ダイ達なら大丈夫だろうけど、もしザボエラやミストバーンに知られたらどんな実験されるか……。だったら始めから黙っていた方がいい。

「優香がそういうなら」

ヒーロー正直すぎて怖いわー。何も疑問持たないで了承しちゃったよー。

「そーいえばさー、優香」

「何?」

「優香の後ろにいるシャドー、どうする?」

……はい?

ゆつくりと振り向く。

そこには、黄色の目を光らせたシャドーがこつちを見ていた。

「ほぎやああ!」

絶叫。静かな森に私の声が響き渡る。

「……っユウカ! 敵か!」

武器を手に駆けつけてくる二人。私は腰が抜けてその場に座りこんでしまった。揺らめく黒い影を見たクロコダインが真空の斧を振りかざそうとすると、シャドーは私たちと二人の間へ割り込むように移動した。両腕を真横に伸ばし、私を守ろうとしているように見える。

「そいつは?」

「なんかいつの間にかいたんです……」

ふわりと佇んでいるそのシャドーは、二人が構えを解くのを確認して腕を下ろした。くるりとその場で回って、私を真っ直ぐ見て動かない。

はっ、これがもしかして例の『なかまになりたそうにこちらをみている!』ってやつ

!?

「敵か？」

ふるふる、と頭を横に振る。

「ぼくらのなかまになりたいの？」

頷く。野良モンスターを仲間にするのに必要なのは。

「名前……必要だよね」

うむ、と頷くクロコデザイン。

シャドー、黒い、クロ……はさすがに犬みたいだなパス。それじゃ、黒の別の言い方……。

「ネロ……はどうかかな」

ぼつりと思いつきで零しただけの言葉。いろいろ候補上げてから選んでもらうようにしようかな、と私は思っていた。

だが、名前候補の一つをシャドーが聞いた瞬間。目をかっぴらいて大仰なお辞儀をする。

「……ネロ、それが我が名なのですなマスター。ただの影であつたワタクシに与えられし命、元より惜しく等ありません。これよりネロは、マスターに永遠の忠誠を誓いま

しよう！」

なんだこれ。

……いやホントに、なんだこれ。ものつそいハイテンションで語りだすシャドー、あらためネロ。クロコダインもヒュンケルも口開いちやつてるよ。

「マスター！ このネロがいる限り、大魔王だろうが勇者だろうがその御体に指一本触れさせません!!」

妙に張り切りすぎているシャドー。荒い鼻息が聞こえてきそうだ。いやシャドーに鼻無いけど。

あれー？ この世界じゃシャドーやガストは暗黒闘気からできている感じじゃなかったけー？ おつかしいなー私の目の前にいるシャドーがミストバーンと同系列のモンスターに見えないけどなー。

なんかこのノリどこかで見た気がするような……あ、オバロのパンドラズアクター。「マスター、ピンクワニ&死に急ぎ野郎と戦う必要などありません。経験を稼ぐのは試験の門かメタキンコインと相場が決まっています。無駄に体力を使う必要はありません」

「……………え」

なんでお前DQXのこと知ってるの!?

「私はマスターの影。マスターの知識は全て存じ上げております」

胸に手を置いて、私の心の中の疑問に答えるネロ。こいつ心の中までお見通しかい!

いやだこんな。バンドラズアクターモドキ!

「…………何を言っているのかわからん所もあるが、お前がユウカを守る、ということか?」
「勿論で御座います!! 分かりきっていることを質問なんかすんな魔王軍の裏切り者達
!!」

私以外には毒吐きまくるのか。言葉使いも荒くなってるし。お前からマスターに近寄るんじゃねえオーラを出しながら私の影に足(といえるのか?)を突っ込んでいるネロ。ヒーローは私の前をびよこびよこ跳ねている。

わーい前も後ろも安全だー……。ネロが敵に変な挑発さえしなければ。この性格だと絶対に敵に対しても毒吐くよね。相手キレるよね。矛先私に向くよね。

こんな仲間で大丈夫かフレイザード戦!?

第五話 優香達が戦いに参加した！

（ポップサイド）

「ユウカ、ポップは任せた」

「了解です、ヒーローお願い！」

「ピキーン！」

ヒュンケルによつて氷魔塔が崩れた後、俺は知らない女の人とスライムの回復呪文で手当されていた。

「お前達はあの女をやれ！ ヒュンケルは俺が直々に殺してやる！」

ハドラーが部下に命令を出す。ガーゴイルやアークデーモンが武器を手にこちらへ向かってくるのに、あいっは見向きもしない。アバンの使徒としての使命に目覚めたと思っていたが、間違いだったのか!? くそ、俺の呪文でどれだけ仕留められるか……！
体を起こそうとすると、女性が俺を軽く押さえて首を横に振る。

「ヒーロー、ガンガンいっちゃって！」

了解の意を示すようその場で飛び跳ねるスライム。こんなところでやられるわけにはいかないってのに！ スライム一匹じゃ戦闘にもならねえよ……！！

「随分と薄情だな。自分の身が惜しいか?」

「ふ、どうやら俺がいない間に、魔王軍は相手の力量も測れなくなったらしいな」

「ピキキーツ!」

スライムが叫ぶと同時にガーゴイル達に向かって稲妻が落ちる。忘れるはずがない、その稲妻は。

「ライデインだ?!? そのスライム……まさか貴様は!」

「は? 貴様はー、なんて格好つけやがって鼻垂れ中間管理職のくせに生意気なんですよ元魔王。マスターの安眠の為にもさつきとくたばりやがれ! ドルクマ!」

ハドラーに向かってドルクマという聞いたこともない呪文を使うシャドー。つてか今、女の人の影から出てこなかったか!?

「すごく怪しいだろうけど敵じゃないからね……あとネロ、ドルマ系じゃなくてヒヤド系使ってるって私言わなかった!」

「は、うっかりしていましたマスター! これからはマヒヤデドスを使うようにします!」

「駄目だこいつ、早く何とかしないと……」

「……ピキ」

何言ってるのか意味がわからない所もあるが、俺たちの力になってくれるのは間違いない

ないだろう。ヒュンケルが俺たちに声をかける。

「マアム、ポップ、ここは俺達に任せて中央塔へ向かえ。ダイもすぐ駆けつけてくるはずだ！」

マアムは戸惑っているようだった。仕方ねえ、相手はハドラーだ。ヒュンケルとあの女の人のモンスター達がいるとはいえ、勝てるかどうか不安なんだろう。

「で、でも……」

「そっかサンキュー！ 誰だか知んねえけど、あんたもありがとよっ！」

マアムの手を取って走り出す。まだマアムは心配そうな顔をしてヒュンケル達を見つめている。

「心配いらねえよ。あのヒュンケルが助っ人に連れて来たんだぜ？ だから大丈夫だつて！」

く主人公 side く

「マスターに手を上げようとするなど……死んでくれる？ というわけでザラキーマ」

「……うわー」

「これはひどい」

ライデインをくらったガーゴイル達が立ち上がるうとした所にネタ交えつつ即死決

める仲間モンスターってどうよ。死霊が敵の周囲に漂う。アークデーモンには即死入ってないけど、頭をおさえて蹲っている。戦力にはならないだろう。

ハドラーには効いていない。まあ言っちゃえばボスだしね。即死決まる魔王っていないよね。条件揃えばダメージくらう破壊神はいたけど。

なんとかかこつちに向かつて呪文を唱えようとするアークデーモンに、ネロは追い打ちをかけた。

「さらにマヒヤド! コキユートスキユールボラ 死と氷の溶鉱炉、完成です」

アークデーモンの頭上から巨大な氷塊が落ちてきた。周囲にはザラキーマで呼んだ死霊達。逃げ場は無い。なすすべも無くマヒヤドに押しつぶされる。……あ、これ蒼天のソウラに出てきた技。私の記憶から引つ張り出したんだろうけど、こんなところで使うとは思わなかった。

「……こつちは大丈夫だけど、加勢しよっか?」

「父の仇だ、ハドラーは俺が倒す。ユウカはポップ達を追ってくれ」

「カツコつけ発見く、壁にでも話しかけたらどうです? 過去形になりたいんですねえ、わかると」

「ちよつとネロ黙って」

「了解ですマスター!」

原作ではハドラーに勝っているとはいえ、相手は元魔王。助けようかとも思ったけど、あの目の光を見たら任せるしかないよね。ポップが走って行った方へ足を向ける。

「負けないでよね、ヒュンケル！」

ちらりとこちらを見て、口の端を上げるヒュンケル。

「マスター、ワタクシのトベルーラで飛んでいきますか？」

羽をはためかせながらネロが提案する。走って追いかけるよりは空を飛ぶ方が楽だろう。

「お願い」

「畏まりました、では」

ネロがその姿を黒い霧のようなものに変え、私の背中に纏わり付いた。霧は集まり、コウモリのような羽だけの姿になった。私はヒーローを抱き抱えた。

「それでは……トベルーラ！」

体が空へと舞い上がる。私達は中央塔まで真っ直ぐ飛んでいこうとした、が。

「うわあっ!?!」

塔から炎が放たれる。ネロが旋回してくれたお陰で無事だったが、何発も撃たれたらいつかは当たる。これは間違いなくフレイザードの仕業だ。

「走るしかないか……降りよう、ネロ。……ネロ？」

「……おのれおのれおのれおのれえっ!」

ネロがキレた。いつか来るとは思ってたけど早すぎない!?

「あわわ……」

ヒーローが腕の中で震えている。落ち着かせるために頭をぼんぼんする。ダイ達が見えたのでそこに着陸するようネロに伝えると無言で降下していった。沈黙が怖い。

「ほいつ、と。ヒーロー大丈夫? ネロは……うん。大丈夫だね!」

「……そのシャドー、大丈夫そうには見えないけどな……」

ネロが呪詛を吐いているのは気にしてはいけない。いいね?

「私は優香。この子はヒーローで……このやばそうなのがネロ。君がダイで間違いない?」

「あ、はい! 俺がダイです。こっちはゴメちゃんって言っただ」

「ピイツ!」

竜の騎士と神の涙。こうして見ると普通の男の子とモンスターにしか見えない。大魔王を討つ世界の希望。

「クロコダインとヒュンケルから話は聞いた。私達も手伝うよ」

「ええっ! そんな、俺たちの戦いに巻き込むわけには……」

「まあ魔王軍に狙われてるし、もうどうにでもなれ、みたいな所はあるよ」

「はあ!? 魔王軍に狙われてるって、どんなことしたらそうなるんだよ!」
ポップが叫ぶ。まあ戦闘能力無さそうな女が狙われてる、ってなったら普通そうなるよねー。

「後で話す! 日没までに倒さなきゃいけないんでしょ!」

私がそう言うと、アバンの使徒達は弾かれたように動きだした。

「俺はポップ!」

「マアムよ、よろしく!」

「よろしくお願ひします……行くよ、皆!」

「おうともさー!」

「炎と氷の合体事故野郎、砕いて武器の材料にしてやろうか……」

ネ口はいい加減戻って来てお願ひ。